

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター 加賀谷 勝

「子どもの発言がこだまし合う授業」

ある小学校の授業の一コマ。一人の子どもの発言が教室内にこだまし、次から次へとつながっていきました。私はその雰囲気引き込まれ、一緒に参加したい気持ちになりました。

〈こだまし合う授業づくり〉



- 1 本時のめあて、学習活動の流れ、ゴールを視覚化して見通しをもたせる
→「ここまでできたら今日はゴールだよ」と伝えると、子どもは「よし、じゃあそこまで頑張ろう」とやる気が増す。
- 2 視覚刺激や具体物を提示し、「あっ面白そうだ」と子どもの参加スイッチをONにする
→人は視覚刺激や動く物に注目するので、具体物を活用したり、本時と関連付けた身近なエピソードを紹介したりして、子どもの興味を引き付ける。
- 3 話し合いが中心のときは、コの字型の座席にする
→互いの表情が見えるので、話しやすい雰囲気になり、発言がつながりやすくなる。
→周りが手を挙げているのが見えるので、自分も挙げようという気持ちになれる（1時間の中で何も話さないで終わる子どもが少なくなる）。
→子ども全体を見渡せるので、教師にゆとりが生まれる。
→子ども同士が教え合ったり、学び合ったりすることができるので、考えが深められる。
- 4 思考を促す発問を工夫したり、肯定的な評価を伝えたりする
→子どもが戸惑わないように、何をするのか、何のためにするのかを明確に伝える。
→子どもの発言の意図が分かるように、キーワードを板書したり、確認したりして思考過程をそろえる。
→子どもの発言に対して、言葉による肯定的な評価に加えて、にっこり微笑んだり、頷いたり、手でサインしたり、拍手をしたりするなど、ノンバーバル対応で認める。
- 5 構造化された板書を心掛ける
→自分の考えを整理できるように、一目で授業の流れや友達の意見等が分かるようにする。
→重要な部分をチョークの色を変えたり、線で囲んだりして強調する。カードや写真等の視覚情報を提示する。

言葉は、人から人へ『こだま』します。自分が優しく話すと、相手も穏やかに答えを返してくれます。言葉がこだますると、お互いを理解し合うことになり、信頼関係が生まれます。信頼関係が築かれている学級は、子どもの発言がその場限りで途切れず、振り出された言葉はこだまし、面白いようにつながっていきます。授業は学級の人間関係を示すバロメーターです。

**とれたて直送便**

子どもが「痛い!」と言ったら、どのような言葉を掛けますか？

「痛いね」と言葉を掛けると、痛みは和らぎます。「痛いね、痛いね」と繰り返しこだますると、心まで落ち着きます。今は「痛い」と言ったとき、「痛くない!」と言う大人が増えました。「痛くない!」と否定された子どもの痛さや悲しさは、心の中にそのまま入れるしかありません。そして、いっぱいになると、心の中を空っぽにするため、大人の気を引くような問題行動を起こします。子どもの言葉にこだまし合い、寄り添いましょう。